

フッサール初期時間論の基本概念とアポリア (I)

宮 原 勇

0. はじめに

フッサール (Edmund Husserl, 1859–1938) は、『論理学研究』(1900/1901)において、現象学 (Phänomenologie) という方法論上の理念を提唱した。われわれの認識活動を〈客観と主観との相関関係 (Korrelation)〉という視点で考察する方法であり、認識においてわれわれの意識の内部に形成される認識内容がどのような認知プロセスによって生成するかを解明しようとするプロジェクトである。彼はそのような新たな方法を駆使して、1904年から1905年にかけて、知覚、想像、時間、空間といった現象に関する分析を行った。すでにその時期の講義録や草稿のほとんどは、没後刊行されはじめた全集 *Husserliana* のそれぞれの巻として公刊された¹。しかし、その中の時間論に関しては、生前すでに弟子の Edith Stein (修道女でフッサールの弟子。ユダヤ人でアウシュビッツ = ビルケナウ収容所にて1942年に亡くなる) と Martin Heidegger によって編集され、*Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*, Bd. IX, 1928において刊行されていた。しかし、このテキストはどのような草稿からどのような方針で構成されたのか明確ではなく、テキスト内部の整合性や図表の表記の仕方などに問題があった。戦後、1966年に *Husserliana*, Bd. Xとして Rudolf Boehm の編纂にて、1893年から1917年までに書かれた時間に関する包括的なテキスト群が刊行され、この時期の時間論の全貌が垣間見られるようになった。しかし、まだ *Jahrbuch* での章立や構成を前提としているので、それを読む者にとって統合的な理解が容易ではない箇所もみられる。

英訳は、1964年に *Jahrbuch* 版を底本に James S. Churchill²が翻訳したものと³、*Husserliana* 版を底本に John Barnett Brough⁴の訳したものとがある⁵。両者の間にはテキスト解釈上の相違がかなり多く見られる。

1 *Husserliana* (以下では Hua と省略し巻数を付す), Bd. II, *Die Idee der Phänomenologie*, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1973. 1907年『物と空間』講義の際の入門として五回なされた所謂「五講義」。Hua XVI, *Ding und Raum Vorlesungen* 1907, 1973, Hua XXIII, *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung*, 1980. Hua XXIII には、1904/05の講義の一部が含まれている。

2 Heidegger の下に留学し、Indiana University で哲学を教えた。

3 Edmund Husserl, *The Phenomenology of Internal Time-Consciousness*, Martinus Nijhoff, The Hague, 1964.

4 Georgetown University で教鞭をとる。翻訳は、Bernet が勧めたとのこと。

5 Edmund Husserl, *On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time (1893–1917)*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, Boston, London, 1991.

本考察においては、テキスト解釈上の議論をしながら、次に掲げるいくつかの初期フッサールの基本概念の枠組みを崩すことなく、時間にまつわる現象が果たして整合的に説明されているかを検証することとする。

1. 基本概念

下記の基本概念は『論理学研究』初版⁶が出版された1900/01年以降、そして『純粹現象学および現象学的哲学の諸構想（イデー）』第一巻1913年に至るまでの時期の認識論上のスキームである。

I. 人間の認知活動を志向性、ないしは志向作用という。

[日常言語では、心の働きを表す動詞、認知動詞がそれに対応する。例えば、見る、聞く、考える、想像する、思い出す、願望する、愛する、想定する、疑う、信じる等。]

II. 志向作用には、それぞれ対象が対応するとともに、そのような志向作用によって意識内に生じた表象（Vorstellung）、あるいは意識内容（Inhalt）が対応している。つまり、〈作用—内容—対象〉という三項関係が想定されている。

[日常言語では、動詞の原形、ないしは不定詞で表される志向作用に対して、〈the + 過去分詞〉という形式で表される要素があり、それはさらに直接目的語（direct object）に対応する対象（object）と、意識内容（content）との区別がある。つまり、「知覚されたもの」とは、知覚の対象なのか、知覚された結果生じた認識内容なのかの別があるということ。]

III. 志向性には、「現在化」（Gegenwärtigung）と「現前化」（Vergegenwärtigung）の区別がある。現在化という志向作用のグループには、知覚が含まれ、現前化のグループには、記憶（長期記憶としての想起）や想像が含まれる。

IV. 記憶には第一次記憶（短期記憶）と第二次記憶（長期記憶）がある。前者は「過去把持」（Retention）といい、後者は「想起」（Wiedererinnerung）という。

V. 外界の様々な事象やわれわれの意識の内部に生起する心の活動や感情などをみな「現象」（Phänomenon）という。それに対して、「現出」（Erscheinung）といった場合、〈～

⁶ 現行の『論理学研究』は『イデー I』が刊行された1913年に大幅に変更されたものであり、特に認識論上重要な箇所には修正が加えられている。

が現出する」といった動詞表現を念頭に置いて使用され、何らかの対象が「現出するもの」(das Erscheinende)と表現されるとともに、「現出」とは、そのようにして現出している「現象」そのものを指す。

VI. 時間的に変化する対象に関して、連続体 (Kontinuum) とは、始まりと終わりをもつひとまとまりの対象をいい、それを形成する部分を位相 (Phase) という。さらにそれぞれの連続体は、時間位置 (Zeitstelle)、言い換えれば時点から成っている。時点は、幾何学的点とは異なり一定の可変的幅がある。連続体とその位相との関係は相対的であり、全体と部分の関係に当たる。

VII. 時間には三つの時制がある。即ち、過去、現在、未来である。

VIII. 過去に関して、過去把持と想起の区別があるように、未来に関しては、未来把持 (Protention) と予期 (Erwartung) の区別がある。

IX. 認識とは、意識の内部に対象に関する認識内容を「構成」(Konstitution)する働きである。そのようなプロセス自体を〈対象を構成する〉プロセスとも表現する。そのような構成のプロセスは、感覚が与えられる段階と、そのような感覚を「活性化する」(beseelen)働き、つまり〈意味を付与する〉(Sinnggebung)段階とからなっている。後者の段階の作用を「統握」(Auffassung)と呼ぶ。あるいは、そのようにして成立した認識内容自体を「統握」と呼ぶことがある。

以上の基本的な概念やテーゼを前提にし、下記のいくつかの問題を整合的に説明できるか検討することとする。ここで「前提」という表現を使用したがる、あくまでも暫定的前提であり、問題の解明が困難になった場合には、上記の概念装置の変更が必要になる可能性がある。

2. 問題の提示

さてそこで、Husserliana Bd. Xで展開されている時間論ではいかなる問題が出てきているかをまずは列挙することにする。それらの問題は互いに関連し合っており、その解決はフッサール自身のテキストを解釈するという作業を通じて遂行されるであろう。

問題1 〈時間性の構成にまつわる問題の二重性〉

現象学は根本的には、対象の認識を志向性ととらえ、その分析をするのだが、時間的対象の

構成の分析に際して、それ自体が時間的に経過する現象である志向的作用の働きによって理解しようとする事自体、大きな困難に直面する。時間的对象の構成の問題とそのような構成を遂行する志向作用の時間性の構成という二つの問題を抱え込むことになるからである。

問題2 〈認識作用と認識対象の同時性／非同時性〉

一般的に言って、対象を構成する志向作用とは常に現在時制において機能する。現に存在する対象（あるいは現在持続している時間対象）の構成に関しては、それを構成する志向作用は、対象の時制と合致し、同時性が確保される。具体的には、知覚といった現在化（Gegenwärtigung）によって、ちょうどその知覚作用が遂行されている時間帯に現に持続している時間対象が認識される。しかし、過去や未来といった時制の場合、そのような時間様態にある時間対象を構成する志向作用は、〈現在〉時制において遂行される。そこで、必然的に志向作用と志向対象のそれぞれの時間性が合致しないことになる。基本的にはすべて現在時制において時間対象が構成される。

このような事態そのものは、すでに Augustinus が *Confessiones* Liber XI, Cap. XX にて指摘している〈三重の現前〉という事態である。つまり、時間的对象は、過去に関しては、記憶（*memoria*）によって「過去 [の事物] の現前」（*praesens de praeteritis*）が確保され、現在に関しては、知覚（*contuitus*: an attentive looking at, sight）によって「現在 [の事物] の現前」（*praesens de praesentibus*）が認識され、未来に関しては、期待（*expectatio*）によって「未来 [の事物] の現前」（*praesens de futuris*）が認識されるのである。つまり、過去と未来に関しては、〈過ぎ去った事物がわれわれに現前してくるのはわれわれ自身が現在という時制において遂行する記憶を通じてである〉し、〈未来にある事物がわれわれに現前してくるのはわれわれ自身が現在という時制において遂行する予期を通じてである〉。ということは、対象の時間点とそれに対応する認識作用の時制とが一致する、つまり同時性が成立するのは、現在と知覚のみであり、他の時制に関しては一致しない。

そこで現象学的時間論にとって同時性にまつわる問題は二種類あることになる。つまり、(1) 知覚においては知覚作用と知覚対象との同時性が真の意味で主張できるかという問題と、(2) そのような同時性が成立しない記憶と予期に関して、現在において遂行される認識作用としての記憶と予期は、それぞれの対象の時制である過去と未来というそれぞれの時間性格をどのように「構成」するのか、という問題である。〈もはやない対象〉と〈まだない対象〉は、どのような意味で志向性的対象となりうるのか、という問題でもある。

問題3 〈知覚における同時性〉

(1) の問題について。

知覚はまずは感覚与件（*Empfindungsdatum*）の受容とそのような感覚与件に対しての〈意

味付与) (Sinnggebung) 作用とから成っているとすると、知覚のプロセスは感覚の発生、言い換えると感覚器官における触発 (Affektion) の発生時ではまだ知覚作用が始まったといえないのか。狭義の知覚は、「魂を吹き込む」、「活性化する」(beseelen) と表現される意味付与作用が開始されて初めて知覚プロセスが開始されるのか。あるいは、〈感覚与件の受容〉+〈能動的意味付与作用〉という両方の位相全体を知覚と呼ぶのかといった問題が出てくる。

複数のシラブルを有する単語が発音された場合、それは時間的に変化する対象の認識の例になるが、(i)客観的時間を基準とした分析、(ii)時間意識の内部での連関を考慮して分析し、しかも同時に超越的、つまり外在的对象自体の時間性を解明しようとする場合、(iii)時間意識の内部での連関のみを考慮し、超越的对象を想定せず、内在的領域で認識内容の時間性を解明する場合の三つがあり、それぞれ同時性が成立するか否かで事情が異なる。

(i)の場合。外部のどこかから聞こえてくる声は、厳密には鼓膜に刺激を与えるまでは、広義の知覚はまだ開始されてはいず、感覚の発生自体、物理的音響の発生と完全に一致するとはいえない。当然ながら物理的音響が開始し、持続し、消えるというそれぞれの時点は意識に現れた〈開始—持続—停止〉と完全に一致する訳ではない。(ii)において超越的对象に関する触発によって生じた感覚印象が、ごくわずかの時間であっても過去把持によって一時的に保たれていない場合には、それに対する意味付与作用が働かないのであるから、知覚作用の内部に過去把持という時間に関する志向作用が入り込んでいる。(iii)の場合、知覚のプロセスを広義のものとして受け取るとすると、〈感覚与件の受容〉+〈能動的意味付与作用〉といった認知プロセスが成立して初めて内在的認知内容としての「対象」、ないしは「対象性」が成立するのである。ということは、この場合にだけ、知覚と知覚対象の同時性が認められる⁷。

問題4 〈過去把持と同様の事態が未来把持に関してもあてはまるのか〉

外界からの触発により印象、これをフッサールは原印象 (Urimpression) と呼ぶが、それが生じ、そして過去把持によって一時的に意識内にとどめ置かれ、それに対して意味付与作用によって意味づけがなされ、一つの対象に関する把握としての「知覚」が生ずる。このプロセスは、知覚の過去位相に関する構造であるが、未来方向での位相においては、未来把持 (Protention) が何らかの機能を果たすのではないか、という予想が生ずる。例えば、philosophy という単語は phi-lo-so-phy というシラブルに分解できるが、-lo- の発音が聞こえた段階で phi- は過去把持によって意識にとどめ置かれている。また同時にその時点ですでにリアルタイムで意味付与がなされ、〈philosophy〉ではないかという予料 (Antizipation) がなされると、次の時点での音声的刺激への未来把持が生ずるはずである。つまり、-so- への予料である。ということは、一定の時間間隔において持続する時間対象の知覚の場合、物理的音響が

⁷ Hua X, S. 109ff., Beilage V.

鳴り終わる以前にすでに一定の知覚が成立している可能性がある。もちろん、それはあくまでも予測であり、philo- から、-logy が続くかもしれない。その場合は、予測が破られ、変更がなされ、修正される。未来把持の方向性、あるいは具体的な経験の予料はどのようになされるか、どのような動機付けがなされるかが問題である。例えば、感覚の段階での連想 (Assoziation) なのか、あるいは意味内容に関する統握 (Auffassung) の働きによる予測なのか、考え方にはいくつかの可能性はある。

問題5 〈過去把持と未来把持は、志向性なのか〉

問題4ですでに密かに問題化していたのは、過去把持や未来把持という作用は、端的に「志向性」と言われうるのだろうか、という問いである。

フッサール自身も認めているように⁸、過去把持は、志向性であるがかなり奇妙な構造を持っていた。知覚と同様に現在野 (Präsenzfeld) の中に位置づけられる過去把持であるが、果たしてそれ自体で、対象に関わる措定的作用 (Setzungsakt) なのか解明しなければならない。未来把持に関しても同様の問題がある。

問題6 【テキスト解釈上の問題(-)] 〈志向作用と志向対象／志向内容との同時性というテーゼの否定に関して〉

フッサールによって1908年から1909年にかけて書かれた⁹とする草稿 (Nr. 50草稿、Hua X S. 324-334、これは Beilage V、同 S. 109ff. に関係する) においてなされた立場の変更を検討する。つまり、それまで知覚 (作用) の時間と知覚されたものとの時間が同一である、あるいは感覚 (作用) の時間と感覚されたものの時間とは同一であるという〈志向作用と志向対象／志向内容との同時性〉というテーゼが否定されたとされる見解に関して検討する。このような見解は、Leuven の Husserl-Archief にかかわる三人の研究者 (Rudolf Bernet: 1946-, Iso Kern: 1937-, Eduard Marbach: 1943-) による著作 *Edmund Husserl, Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner, Hamburg, 1989, S. 102 によって明確な形で定式化された。

しかし、Stefan Gerlach は、2013年に刊行された論文にて、そのような見解を批判した¹⁰。彼によれば、「(1909年以降見られる)〈絶対的〉時間流についてのフッサールの新しいテーゼは、[それまでの] 意識の時間性に関するテーゼを撤回させるものでもなければ、意識と意識内部において現前する時間的客観との同時性というテーゼを撤回するものでもない。ただ修正するにすぎない。Nr. 50のテキストの中には、その件に関する議論は見いだされず、別の種類

⁸ Hua X, S. 31ff, §12.

⁹ Husserliana Bd. X の編纂者 Rudolf Boehm による推定。

¹⁰ Stefan Gerlach, Ist das Bewusstsein mit sich und seinen Gegenständen zugleich?, Zu Husserls Modifikation der Zeittheorie um 1909, in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Band 67 (2013), 3, S. 396ff.

のいくつかの問題が見いだされるのみである。それらの問題というのは、フッサールを、絶対的意識流の導入によって、主観的意識時間に関する彼のテーゼを変容させ、すべての時間関係の新たな基礎付けをするように向かわせた問題である」(S. 398) という。つまり、同時が否かという単純な選択ではなく、別次元への展開がなされたという。

このような Gerlach の主張の妥当性をテキストの精密な解釈を通じて検討する必要がある。

問題7 【テキスト解釈上の問題(二)】〈ダイアグラムの解釈について〉

1908/9年の「転換」(Bernet et al.)か「展開」(Gerlach)の議論に拘わらず、フッサールの時間論ではダイアグラムと称される図表が使用されている。そのような図の中には刊行に際して編纂者が記号を変えたりしているものもある。また、本文とどのように対応するか解釈が難しい点が見られる。特に図表に用いられている線分が分析においてどのように考えられているか、解釈が分かれる。特に下記の表現の解釈に問題がある。

- ・ Ordinate 普通は数学での y 座標、縦座標のこと。
- ・ Quer [intentionalität] ——横に、横向きに、横切って
- ・ Längs [intentionalität] ——～に沿って、縦に、縦長に

時間図表の場合、時間流の流れの方向が水平方向であるから、縦と横の表現をそのまま当てはめれば逆になる可能性がある。水平方向に流れる川を横切って渡ったという場合、水平方向に渡ったということではなく、片方の岸から垂直方向に対岸に渡ることになる。また水平方向に流れる川に対して、川の流れに沿った方向と、垂直方向という意味での「縦」とは、90度変わってくる。Quer に関しては、*Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm* (online 版) では、下記のような用例がある¹¹。

geh von hier aus queer über die strasze nach dem gasthof. Schiller 3, 568;

[ここから道を横切って宿屋へ行け]

ということになると Querintentionalität は、「斜めに傾斜する志向性」という意味の可能性も出てくる。

¹¹ quer gegenüber という表現に関して、下記のような用例が英訳とともに見つかった。

[...] Bahnhofstrasse entlang Richtung Marktplatz bis zur ersten grossen Kreuzung, quer gegenüber befindet sich unsere Filiale im ersten Stock des UNION-Gebäudes.

[駅前通り沿いを中央広場に向かって最初の大交差点まで行くと、斜向かいのユニオンビルの二階に我が社の支店があります。]

[...] along Bahnhofstrasse towards Marktplatz to the first large crossing, diagonally opposite, our branch is located on the first floor of the UNION building.

したがって、quer は場合によっては、「斜め」という意味合いが出てくる。

以上がフッサール初期時間論を検討するときに考慮せねばならない問題群である。これらの問題はそれぞれ個別に究明すればよいものではなく、相互に関連しており、全体的に論ずる必要がある。従って、以下では上述の基本概念と諸問題を前提にしながら、フッサール初期時間論において重要だと思われるテキストと時間のダイアグラムをいくつか取り上げながら、問題を究明することとする。

3. 1906/1907年の講義『論理学と認識論への入門』での時間論

1905年にゲッチンゲン大学でなされた時間論講義を中核としてまとめられた Jahrbuch の論考には、1911年に執筆されたものや、1913年に刊行の『イデー』後の草稿に由来するテキストも組み入れられているので¹²、本論文の第2章で挙げられた問題を究明するには不都合が生じている。そこで1908年から1909年にかけて書かれたされる Nr. 50草稿においてなされた立場の変更を検証するためには、それ以前の認識論や時間論大枠を確認しておく必要がある。そのためには、Husserlina Bd. XXIV として刊行された1906/07年の講義『論理学と認識論への入門』での時間論を見ておこう。この講義の中では「低次の客観態諸形式」に関する議論として時間意識の分析がなされている。

まず、§42.〈意識の諸概念〉のa)〈体験としての意識〉では、感覚に関して言及がなされている。ここでは、知覚自体を形成している「体験契機」(Erlebnismomente)がどのように意識されるかが論じられている。まず、知覚における感覚(Empfindung)と知覚統握(Wahrnehmungsauffassung)とが区別され、それらは別々に「意識」されることが確認され、それらがどのように意識されるかは別々の問題であると言う。

例えば、「木」を見ている場合、知覚とは、そのような時にわれわれが有している一種の体験(Erlebnis)である。その場合、実際にわれわれの目の前にその木が、特定の現出面を伴って立っている。つまり、そのような現実の樹木が知覚の対象となっているのであり、知覚という体験を構成している体験契機である感覚を見ているのではないことをフッサールは明言する。われわれの知覚的注視や知覚的信念、さらには統覚的客観化作用(apperzeptives Objektivieren)が向かうのは、感覚ではない。しかし、そのような樹木を見るという知覚体験に於いても、感覚は「意識」されているのである。ここで問題は、知覚されてはいないが、「意識されている」と言ったとき、何を意味しているのかである。

次にフッサールは、反省の可能性を語る。

つまり、端的に樹木や家屋に対してまなごしを向ける段階から、その知覚自体にまなごしを向けるという「反省」(Reflexion)へと移行することが可能であるという。知覚自体には、本

¹² Husserliana Bd. X に収録されたテキストの執筆年月に関しては本論文の付属の表「Husserliana X の草稿と執筆年代の推定表」を参照のこと。

質的には、それ自体が何らかの仕方で対象化される可能性が属しているという。そのような反省によって、知覚自体とその知覚の内容 (Inhalt) へもまなざしが向けられるのである (Hua XXIV, 244)。しかし、この場合の反省というのは、「知覚とその内容に関係付けられた知覚」であり、いわゆる「内的知覚」である。つまり〈知覚の知覚〉である。ということは、「反省的知覚」において、端的な知覚の感覚的内容は「与えられる」のであるが、それはあくまでも反省的知覚によって「知覚された」ものとして与えられているのである。

そこで問題が出てくる。「知覚の内容」、言い換えれば「[実際の樹木などの知覚の] 感覚的内実」(ihr Gehalt an Empfindungen) は、「反省に対して与えられる以前には」、どのような仕方で知覚の中に存在しているのかという問題である¹³。

第一段階の端的な知覚をフッサールは、「素朴な知覚」と呼び、そして次のように言う。

その素朴な知覚全体と、そのような素朴な知覚の要素、つまり「感覚素材」(Empfindungsmaterial)、「注意作用」(Aufmerken)、そして「統覚作用」(Apperzipieren) は、[第二段階の知覚である反省的知覚が遂行される以前にも] 既に体験されているのであり、しかもただ体験されているだけである。ある十全的な知覚の場合には、しかも、アクチュアルな現象学的時間の「流れ」(Fluß) の中で、感覚内容の流動 (Hinströmen) に向かっている反省的で、かつ十全的な知覚の場合には、知覚されている諸対象とは、同時に諸体験なのである。[その場合に] 流れ去りつつあるもろもろの感覚は、体験されているが、[素朴な知覚の場合とは違って、反省的知覚の場合には] しかしただ体験されているのではない。そうではなくて、意識されているのであり、この場合、知覚されているのである。したがって、ある知覚現象 (Wahrnehmungsphänomen) において与えられているのであり、諸対象として見つめられているのである。さらにまた、この見つめること (Schauen) 自体が、ただ〈現象以前の仕方〉(präphänomenal) でではあるが、体験されているのである¹⁴。

この記述の中で特に注目すべき点としては次の二点を挙げることができる。

1. 感覚内容自体は、反省的知覚によって、対象化され〈知覚される〉が、それ以前は、〈体験されている〉ということ。
2. 知覚経験において、「流れ去りつつある」(fließend)、ないしは「流動」(Hinströmen) というメタファーで表現されているのは、感覚的内容、ないしは諸感覚であるということ。

¹³ Hua XXIV, 244. 草稿 A VI 8 II.

¹⁴ Ebenda. 草稿 A VI 121 I.

特に2の「流れ」のメタファーに関しては、感覚のみならず、「アクチュアルな現象学的時間の流れ (Fluß)」が語られている点に注目しなければならない。

上述の分析に従えば、「体験」という概念は、〈時間の流れへと向かう十全的な反省的知覚の「内在的客観」〉という意味 a と、〈十全的な反省的知覚によっては客観化されていない、いわば「現象以前の」存在〉を言う場合の二つ目の意味 β を持っている。意味 a としての体験は、対象化され、内部知覚によって〈知覚〉されているが、体験 β は、「体験され」てはいるが、知覚されていない状態である。

この1906/07年の講義では、「絶対的」(absolut) という形容詞を、その体験 β を修飾することに使っている。つまり「絶対的で、十全的な知覚統握によっては客観化されていない存在」(das absolute, nicht durch eine adäquate Wahrnehmungsauffassung objektivierete Sein)¹⁵ のように使用されている。そして、次のような記述がある。

[上記のような意味での] 絶対的意識は、ひとつの時間流であり、その中で、内在的知覚のもろもろの作用が構成 (konstituieren) されるとともに、その中において、その内在的知覚作用自体に属する個別的契機やその部分も囲い込まれており、それがさらには所与へと転化されるのである¹⁶。

ここでは「絶対的」状態での意識は、それ自体としては反省以前の、対象化されていない状態であるが、ひとつの時間の流れとして、その中で反省的知覚が遂行される可能性を述べている。そして、同時にフッサールはここで、外部知覚の素材となる感覚とそれを「活性化する」統覚の関係を次のように記述する。

外部知覚の感覚素材は、単なる体験作用の全体意識から取り出して境界を設定されるが、しかし十全的に見つめること [対象すべての側面をくまなく直観する作用] によって、取り出されて境界を設定されることはない。見つめながらの反省によってはじめて、われわれは感覚素材を見るのであり、ひとつの境界を持ってものとして見るのである。このような感覚的素材を活性化し、現にそこに存在する一軒の家についての超越的 (transzendierend) な意識を作り上げる統覚 (Apperzeption) の統一と、そしてなによりも [そのような具体的な対象に関して] 注目をする思念とが、その感覚素材に、〈ひとつの体験の単位一般の中で特別な単位であること〉を保証しているのである。それは、この統覚作用や注意作用自体が、それぞれ一つの分離された単位であるように。しかしなが

¹⁵ Hua XXIV. 246. 草稿 A VI 121 I.

¹⁶ Ebenda. 草稿 A VI 121 I.

ら、見られ、視覚の中で思念され、多分与えられているのは、その家なのである。家こそが、客観性 (Objektivität) 全体の中から取り出されて見つめられているものなのであり、その全体的客観性を志向的に創造することこそ、その家の知覚がその一部をなす全体的知覚の為せる働きなのである¹⁷。

ここから見て取れるフッサールの理論は次のようになっている。

まず、知覚を形成する非独立的部分としての「契機」には、大きく分けて二つある。それは「素材」としての感覚とそして作用性質としての知覚や注視、注目作用である。それらが集まって、ひとつの単位としての知覚体験を構成するが、感覚素材と作用そのものとは存在形態としては別々のものであり、それらと体験とも存在形態は異なっている。つまり、「集まる」といっても+、つまり加法的集合ではなく、×、つまり乗法的集合になっている。加法的集合と乗法的集合とを式で表すと下記のようなになる。

$$(1) \sum_{i=1}^n x_i \qquad (2) \prod_{i=1}^n x_i$$

この場合、(1)によって生ずる和は、部分と全体とが同じ存在形態のものであり、それはちょうどレゴのブロックをいくつか組み立ててひとつの対象を作るようなものである。(2)によって生ずる積は、構成要素が互いに全く違う存在形態であってもよいのであり、その演算から出てくる結果もまた違った存在形態となる。例えば、赤いレゴの一つのブロックは「赤」という色と「立体」の形とからなっているとも言えるし、「プラスチック」という素材もその構成要素であると言える。それぞれ、色、形、素材はみな〈存在形態〉としては異なっている。

以上の概念を使って知覚体験、感覚素材、統覚作用、注意作用、さらには個別的知覚と全体知覚との関係を説明すれば下記のようなになる。

- ・一つの知覚体験は、その非独立的部分たる要素として、感覚素材や統覚作用、ないしは注意作用を有している。従って、知覚体験 = 感覚素材 × 統覚作用となる。つまりΠの関係である。
- ・われわれの目の前に展開している客観性全体を知覚する、全体的知覚といったものが可能であるとするならば、そのような全体的知覚に対して、個々の事物や出来事を対象とする知覚は、その独立的部分となっている。つまり、全体的知覚 = 部分知覚 + 部分知覚 + …… + 部分知覚となる。つまり、Σの関係となる。

このように考えると、目の前の現象全体から「赤い家」を取り出してそれを知覚するという

¹⁷ Ebenda. 草稿 A VI 121 I.

ことと、赤い感覚素材そのものに注目し、取り出すということとは根本的に違った操作であるということである。感覚素材は、知覚体験のみならず、体験作用全体の中から取り出して、そのもの自身として境界をはっきり設定できるかのようにフッサールは主張しているが、これは事実問題として可能かどうか疑わしい。というのも、赤い感覚素材とは、あくまでもその「赤い家」の〈赤さ〉であり、その赤さを図 (figure) として、背景としての地 (ground) から切り離し、取り出し、境界づけることができるのは、「赤い家」という統覚が成立してからではないかと考えられるからである。それとも、統覚が成立してからあとに、そのような知覚体験全体から統覚的要素を引き算した結果、残余として感覚素材が取り出されるというのであろうか。端的な、素朴な知覚が成立してからあとで、それに対して遂行される「見つめながらの反省」(die schauende Reflexion)、言い換えれば「反省的看取」によって感覚素材は、それ自身として際立ってくるというのである。ということは、われわれの意識においては、感覚素材そのものが与えられる瞬間というのは確認できないわけである。感覚素材、ないしは感覚内容が時間的に先行するという事態は意識上成立しえなくなる。したがって、前期から『イデーニ I』(1913年刊)の中期まで前提されていた〈感覚素材(内容)とそれを活性化する統覚〉というスキームは、反省による理論的分析の結果、直観的に確認されることなく、〈構築的に〉考え出されたものであるといえよう。

さてここで、先に確認しておいた「流れる」というメタファーに関する事柄、つまり〈知覚経験において、「流れ去りつつある」(fließend)、ないしは「流動」(Hinströmen)というメタファーで表現されているのは、感覚的内容、ないしは諸感覚である〉、つまり「時間流」という表現とともに「流れ去る」という表現は、まずは感覚に関連づけられていることを確認しておきたい。またそれとともにわれわれは「絶対的」という形容詞の使用に関する次のような点も確認しておきたい。すなわち、「絶対的」(absolut)という形容詞は、「[内在領域への反省という] 十全的な知覚統握によっては客観化されてはいない存在」に冠されているのである。ここでの「絶対的」という形容詞は、ある意味では「原初的」(ursprünglich)という形容詞の意味に近い用法であるが、もちろん同義ではない。ただ、内在的反省によってとらえられる以前の「ある意味では素朴な立場での経験のあり方」を指しているように思える。

ただし、1906/07年の講義『論理学と認識論への入門』の〈時間流における客観的時間の構成〉と題された章の内では、「絶対的」という形容詞、ないし副詞は、つぎのような連関で使用される。

- ・「音は過去へと沈み行くが、自らの時間[位置]を変えることはない。時間はじっとしているが、しかし時間は流れてもいる。時間の流れの中で、つまり過去への絶えざる沈下の中

で、流れ去ることのない、絶対的に固定した同一的で、客観的な時間が構成される¹⁸。

- ・点のような音は、その絶対的個性性に於いて、時間質料 (Zeitmaterie) と時間位置とに従って、固定されているのである。この時間位置こそが、まず個性性を構成するのである。結局、本質的に「過去性への」変様に属している統握が、延長せる対象性の固定の下、その内在的で絶対的な時間とともに、過去への絶えざる後退を現出させているのである¹⁹。
- ・時間のアプリアリな本質に次のことが属する。時間は、時間位置の連続体であるが、そのような時間位置を占めている客観性が同一の場合もあれば、異なっている場合もある。そしてまた、絶対的時間の同質性は、過去への変様の流れの中で、そして今の絶えざる源泉の中で、そして創造的時間点の中で、そして時点一般の源泉点の中で、不断に構成されているのである²⁰。[このテキストは Hua X, § 33 にも収録されている]

順に「絶対的に固定した同一的で、客観的な時間」、「内在的で絶対的な時間」、「絶対的時間」とあるが、最初の「絶対的に」とは、「固定した」にかかるので、除外した方がよいのであろうが、しかし〈客観化された、同一的で、同質的な時間〉に対して「絶対的」という形容詞が使用されているところから見て、強い関連性があると考えてもよいだろう。ここで、フッサールの表象の中では、固定していて、動かない時間位置と「絶対的」という修飾語が結びついているのである。哲学史的に見れば時間は流れるという表象と結びつけられて語られるが、しかし「測る」という行為は、スケール自体が流動しては不可能である。つまり、規準は固定していなければならないのである。「流れる」、「流動」という概念自体、相対的な概念であり、絶対的不動性といったものが前提されていると言ってよい。したがって、ここでは nunc fluens に対する nunc stans へとつながる「絶対性」が垣間見られているといえよう。

また問題の提示での問題 3 に関して注目すべき記述がある。すなわち;

- ・さらには、「時間まつわる」事態 (Sachlage) [Sachverhalt と区別して「事況」とは訳さない] のアプリアリな本質に、下記のことが属する。感覚、統握、「時間」位置設定は、皆、同じ時間流に関与しているのであり、客観化された絶対的時間は、感覚や統握に属する時間と同様に、必然的に同一なのである。客観化される以前の時間、例えば感覚に属する時間は、必然的に、感覚の変様やこの変様の度合いに応じた時間位置の客観化の唯一の

¹⁸ Hua, XXIV, 265. 草稿 F I 6.

¹⁹ Hua, XXIV, 267. 草稿 F I 6.

²⁰ Hua, XXIV, 270. Vgl., Hua, X, 72. 草稿 F I 6.

可能性を基礎付けている。例えば、鐘の音が鳴り始める時の客観化された時間点には、それに対応する感覚の時間点が対応している。つまりその感覚は、開始の位相では、同じ時間を有している。つまり、事後的に対象化されると、それは必然的に鐘の音が有している時間位置と同一的に同じ時間位置を保持するのである。

同様にして、知覚の時間と知覚されたものの時間は同一である (identisch dieselbe)。知覚作用は、現出に於ける、知覚されたものと同様に時間において沈下する。そして、反省においては、それぞれの知覚位相に対して、知覚されたものに対してと同様に、同一の時間位置が与えられるはずである²¹。[このテキストは Hua X, § 33にも収録されている]

明らかにここでは、〈知覚作用と知覚されたものとの同時性〉が自明なこととして語られている。鐘の音の鳴り始めと感覚の開始時点、そしてそれに対する統覚作用を含んだ知覚作用の時間位置は、みな同一であると読んでも差し支えないように思われる。〈感覚素材 (内容) とそれを活性化する統覚〉というスキームを前提してはいるが、しかしそれにも拘らず〈知覚作用と知覚されたものとの同時性〉が「鐘の音」という外的事象の知覚の場合にも、認められていることを確認しておく。それと同時に「客観化された絶対的時間」といった表現に注目しておきたい。というのも、あくまでも固定したスケールとしての時間位置の「構成」が重要な問題となっており、いわばこのような構成された、「客観的時間」こそが「絶対的」存在なのである。

しかし一方で、そのように対象化されていない、根源的存在としての感覚流が「絶対的」と形容されていた。まさに〈流れ去りつつある〉(fluens) 存在も「時間流」として時間性の根源なのであった。このようなアポリアがもうこの時点で「絶対的」という形容詞の使用法の中に見られると言ってよい。

4. ダイアグラムに関わるテキストの分析

これまで呈示した基本概念や諸問題を考慮に入れながら、Husserliana Bd. Xとして刊行されている1893年から1917年までのテキストを、特にすべてのダイアグラムに関わるテキストの分析をすることにしたい。

4.1 第10節の時間のダイアグラムの解釈

Husserliana Xで最初に時間のダイアグラムが出てくるのは、第10節であるが、この章は1911年に執筆されたもので、「経過現象の連続体、時間の図表 (ダイアグラム)」と題された草稿 F I 6 Bl. 20-23のテキストである。この時期は Bernet の時代区分では G4にあたり、初期

²¹ Hua, XXIV, 270-71. Vgl., Hua, X, 72. 草稿 F I 6.

時間論が成立した時期でも比較的遅い時期である。

第10節の冒頭にある表現「内在的時間客観」(immanente Zeitobjekte)によって、「音」がピアノの音といった外的対象の音という性格が捨象されて、ただ感覚としてとらえられており、意識の内在領域に属するものとされている。そして、そのような現象が、何らかの外的事物の現れという意味での「現出」(Erscheinung)でないことが強調されている。

しかし、内在的な時間客観は現象学的視点からみれば〈構成〉されるもの、ないしはすでに構成されたものである。そして、その構成のプロセス自体も反省(Reflexion)の対象となり、志向性分析の対象となる。認識の対象が外的事物である場合、感覚器官を通じて感覚与件が与えられ、何らかの認識内容が成立する。そのような一連のプロセス自体は意識の内在領域の実在的(reell)な構成要素であり、それ自体、自己意識の場において、主観自身に対して謂わば〈現れる〉のである。外的事物が知覚において〈現れる〉のに対応して、内的な意識作用自体、内的知覚としての「反省」を通じて〈現れる〉。フッサールの場合、外的事物や抽象的客観が意識の思想的働きによって認識されることを「構成」という概念で捉えるが、内在的領域の対象としての志向作用自体を認識する場合にも「構成する」というモデルが有効であろうか。つまり、前述の基本概念のIXが有効ではない事例が存在する可能性があるのではないか。

この節は、時間的「経過」という現象を分析するものであるが、それは同時に、今と過去という時間的定向(Orientierung)を規定し、今の時点から過去へ経過する(ablaufen)経過性格の生成が分析されているが、ここの議論の特徴として、前述したVIの概念的枠組みが前提となっている。

そして、Hua X 28のダイアグラムの説明が始まるのである。まずフッサールは、「内在的時間客観のそれぞれの経過様態(Ablaufsmodi)は、ひとつの出発点を、いわゆる源泉点(Quellpunkt)を有する」(Hua X 27)ことを強調する。その出発点、源泉点は「今」という性格が与えられていて、それ以後の経過位相はそれ自体ひとつの「連続体」であるという。すなわち次のように言っている。

それ以後の経過位相はどれも、それ自身一個の連続性であり、しかも絶えず拡張する連続性、幾つもの過去を集めた連続性である。

—, daß jede spätere Ablaufphase selbst eine Kontinuität ist, und eine stetig sich erweiternde, eine Kontinuität von Vergangenheiten²².

以上のように述べた後、〈客観の持続の経過様態の連続性(Kontinuität)〉にそれを細分化した〈時点の経過様態の連続性〉を対比し、後者は前者に含まれると言っている。そして、次の

²² Hua X, 28.

ように言う。

持続する客観の経過の連続性は、客観の持続のさまざまな時点の経過諸様態の〔複数の〕連続体 (Kontinua) を自らの諸位相とするひとつの連続体 (Kontinuum) である。

ここでは二つの表現、すなわち *Kontinuität* と *Kontinuum* は基本的にはなんらニュアンスの違いを含ませずに使用している。ある時間客観がまずは今の時点で与えられて、持続しはじめる。そのような持続が終結するか否かに拘わらず、対象の持続の経過はひとつの「連続体」なのである。そして、そのような持続の経過は、さまざまな時点の経過様態の連続体を自らの部分とする連続体だというわけである。ここでは内在化された時間点、つまり客観のように一定の持続を持たないものとして考えられている「時間点」の経過様態の連続体、図表で表せば、「時間点」を幾何学的「点」として便宜上表現すると、経過様態の連続体は「線」で表現されるはずである。それでは、一定の持続を有する客観の経過連続体は、どのように表現されるであろうか。「時間点」が経過様態では、「線」で表現されるとすれば、それ自体一定の持続という「線」で表現される特性を有する客観の経過様態は、二次元的「面」になるはずである。

そして次のように言う。

次々に新しい今が現れるにつれて、今は過去へと転化し、それに伴って、先行していった点の様々な過去の経過連続性全体 (die ganze Ablaufskontinuität der Vergangenheiten des vorangegangenen Punktes) が、「下方へ」(herunter) 退き、一様に、過去の深みへと後退する。

この段階で想定される図表は図1と図2のようになる。

α の段階では、開始点から始まった持続は右手側へと時間点の「今」が移行するにつれて、右手下方に経過連続体が下降しながら、同時に幅広く増大していく。そして、時間客観の持続が終わるとそれまでの連続体はひたすら全体として下降していくのである。これは β の図形となる。 β の段階では、下降しながら増大するということはない。〔時間を変数とした積分を行っているようなものである〕

ここでフッサールのテキストに戻ろう。次のように言う。

われわれの図で、断絶のない縦軸の系列は持続する客観の経過の諸様態を示している。それらの経過様態は (一点) A に始まって最後の今を終点とする一定の広がりまでの間、次第に増大する。次いで、(この持続の) 今をもはや含まない経過様態の系列が始まる。持

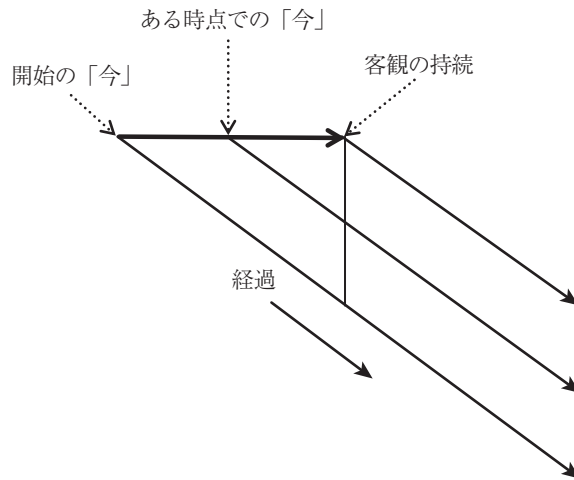


図 1

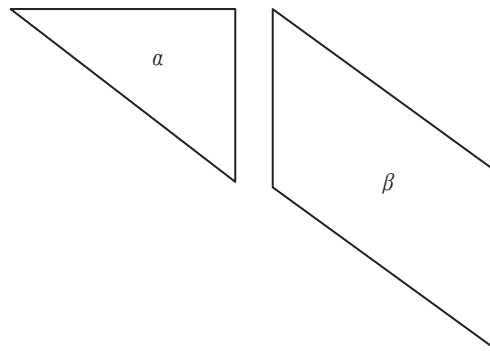


図 2

続はもはや顕在的持続ではなく、過去の持続であり、次第に深く過去へ沈みゆく持続である。したがってこの図は経過様態の二重の連続性を完全に図示している。[立松訳²³]（下線筆者）

In unserer Figur illustriert die stetige Reihe der Ordinaten die Ablaufsmodi des dauernden Objektes. Sie wachsen von A (einem Punkt) an bis zu einer bestimmten Strecke, die das letzte Jetzt zum Endpunkt hat. Dann hebt die Reihe der Ablaufsmodi an, die kein Jetzt (dieser Dauer) mehr enthalten, die Dauer ist nicht mehr aktuelle, sondern vergangene und stetig tiefer in die Vergangenheit sinkende. Die Figur gibt also ein vollständiges Bild der Doppelkontinuität der Ablaufsmodi. (Hua X, S. 28f.)
[Unterstreichung hinzugefügt]

23 エドムント・フッサール『内的時間意識の現象学』（立松弘孝訳）、みすず書房、1967、1977¹²。

前半の二つの文に限り、Churchill による旧英訳を見てみよう。

In our figure the solid horizontal line illustrates the modes of running-off of the enduring object. These modes extend from a point O on for a definite interval which has the last now as an end-point.

これをそのまま訳すと下記のようなになる。

われわれの図では、水平の実線は、持続する客観の経過する諸様態を表している。これらの諸様態は、O点から先に進み、最後の今を終点として有している一定の時間間隔の間、延長している。

Brough による新しい訳はこうなっている。

In our diagram, the continuous series of ordinates illustrates the running-off modes of the enduring object. They grow from A (one point) into a determinate extent, which has the last now as its final point.

訳すと下記のようなになる。

われわれのダイアグラムでは、縦座標からなる連続的系列は、持続する客観の経過する様態を表している。それらは、(一つの点としての) Aから、一定の広がりへと増大し、その広がり終点として最後の今を持っている。

新旧の英訳が著しく異なるのは、die stetige Reihe der Ordinaten という箇所の翻訳であるが、Ordinate は複数形になっているので、旧訳の the solid horizontal line という解釈では、つじつまが合わない。実際にはどのようなになっているのか、Hua X 28のダイアグラムを直接解釈してみよう。そのダイアグラムは図3と図4のようになっている。

図3・図4においてフッサールが言っている「二重の連続性」とはどれを指しているのだろうか。

実は二つの図は図5のように入れ子構造になっているのである。

この二つの図表のうち、上部に置かれているダイアグラムは、音などの持続的客観や、複数のシラブルを含む発声された単語などの場合も表現している。それは一つの音が一つの対象と認識される場合には、完結した連続体と見なされ、他方一連の音から成るメロディーが一つの

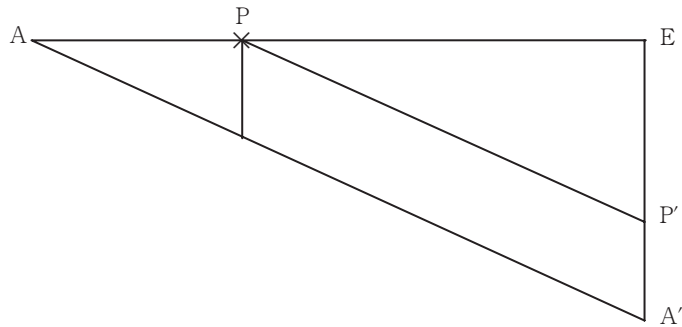


図 3

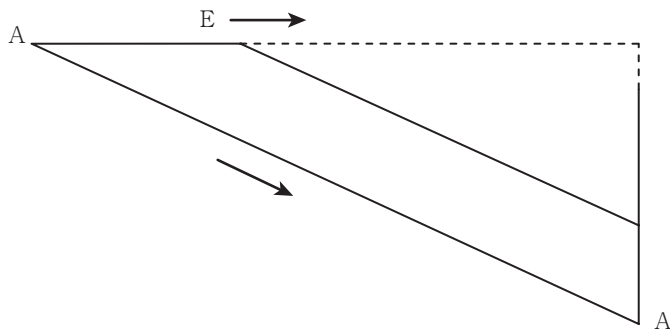


図 4

AE	今の時点の系列
AA'	沈下
EA'	諸位相の連続体 (過去の地平を伴う今の時点)
E →	おそらく他の客観によって充実される今の系列

対象とされた場合には、メロディー自体がひとつの連続体とみなされる。いずれにしても、ひとつの対象がA時点でなり始め、感覚され始めるのだが、それはE時点まで持続する。このことは、上記のダイアグラムの上に位置する図が表現するものであり、点であったものが水平方向で右側に向かっている矢印と、斜め下に下降して行く矢印の二つから成り立つ拡張現象、ないしは増大現象がまず第一段階である。その次に音などの時間対象の持続が途切れてしまったあとで起こるのが、E時点以降の水平方向に進むと同時に下降する現象であり、そのような「経過」現象が第二段階の現象である。図2の α と β といった図形は、そのような二重のプロセスを示している。

そこでフッサールのテキストの次の箇所の解釈が問題となる。

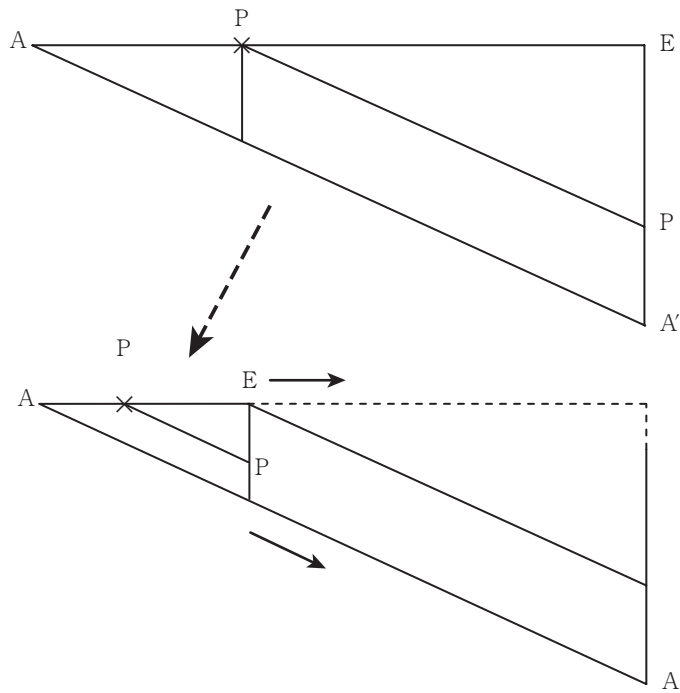


図5

われわれの図で、断絶のない縦軸の系列は持続する客観の経過の諸様態を示している。

特に下線を引いた箇所が問題となる。「縦軸」と訳された単語 *Ordinanten* とは、単数形では *Ordinate* で、*y* 軸、縦座標を意味するが、ここで注目すべきは、複数形になっている点である。ここでは、複数の軸が平行に並んでおり、しかも「経過の諸様相」を象徴するのは *A* から *A*、ないしは *A'* へとつながる「斜めに沈下する複数の軸」を指すと解釈するのも可能だろう。確かに、二つの図のうちの上部に位置する図では、水平方向を右へと進む矢印と斜め下方に進む矢印の二つが相まって、一つの連続体の経過様態を示していると考えられなくもないが、その場合にも「縦軸」と解釈するには難しい。

そこで、われわれはここである仮説を立てたい。まずフッサールが第10節の最後の文で言っている「二重の連続性」というのは、既に述べたような変化の二つの段階、つまり a と β の二つの段階のことであり、上記の「断絶のない縦軸の系列」というのは、その a の段階で生じているはずの現象であり、明確にはこの第10節のダイアグラムでは表現されていない。ではどのようなものなのだろうか。

実はフッサールが時間論で描いてみせたことで有名になったこのダイアグラムは、本当はブレタノーの図式をヒントにフッサールが発展させたものであり、その意味ではフッサールに

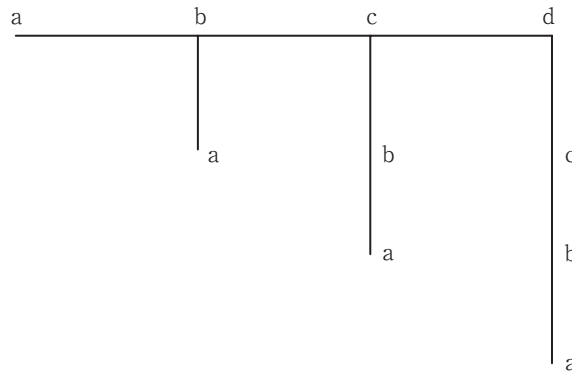


図 6

とってオリジナルなものではないと考えられる。そして、その布伦ターノの図というのが、この第10節での「断絶のない縦軸（複数形）の系列」を明確に表現しているのであり、もともとフッサールもこの図を手掛かりにして、それを複雑化していったと考えられる。その布伦ターノの図というのはフッサールにとって兄弟子にあたる Carl Stumpf (1848-1936) が「布伦ターノの思い出」²⁴にて報告しているものである。それは図6のような図である。

そして、Stumpf は下記のようなコメントを添えている。

布伦ターノは時間意識を当時は次のように記述した。ある特定の知覚内容に関する（外部ないしは内部）知覚のどの瞬間においても、その内容とは性質的に同じではあるが、時間的には一定の限界にまでずれ込んでいる一つの表象が生じている。時間的メルクマールは、その知覚内容に対して、その際、一つの〈内容的〉規定性という意味を有していた。そして、その内容的規定性の同様な変化は、意識に固有のそのような法則性に従っている。布伦ターノは、これを、記憶に関して獲得された連想に対比して、「根源的連想」と名付けた。いくつかの印象 a、b、c、d が続けて生ずるとした場合、二番目の印象が生じた時点で、最初の印象は図にあるような仕方で既に時間的に沈み込んでいる、等々。布伦ターノはこのことを上記の図でもって直観化した。この図においては、水平な列（die Horizontale）は、客観的時間経過に対応しており、それぞれの時点での垂直的な列（die Vertikalen）は、その都度の表象（pl.）を意味している。布伦ターノは後年、「時間意識に関する」事態をまずは分かりやすく説明したこの記述を、まったく文字通りの意味で「変様」させた。つまり、「印象から記憶への」変転とは、内容的なものではなく、表象の様態（der Vorstellungsmodus）の変化として定義したのである。彼にとって、そうする

²⁴ C. Stumpf, *Erinnerungen an Franz Brentano*, in: O. Kraus, *Franz Brentano. Zur Erkenntnis seines Lebens und seiner Lehre*, München: C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1919, SS. 87-149.

ことの根柢というのは、過ぎ去った事柄とは、実在的なもの (real) ではなく、しかも実在的なものでないものは、表象の内容にはなりえないからである²⁵。

以上のようなブレンターノの図6と Stumpf の解説の「垂直的な列」(die Vertikalen) という表現から見ると、系列、ないしは線とは、ブレンターノの図では二種類しかなかったのであり、特に縦線とは時間の流れの中でだんだんと伸張していく一連の縦線の系列を指すのである。それが、Husserliana Bd. X の第10節のダイアグラムは、さらに進んで $A \rightarrow A'$ の流れも書き込まれ、同時に複数の縦線が消去された故に、テキストの表現と齟齬を来すことになったと思われる。 (未完)

キーワード：フッサール、時間意識、ブレンターノ、ダイアグラム

²⁵ Stumpf, a.a.O., S. 136.

Husserliana X の草稿と執筆年代の推定表

章	タイトル	執筆年 (推定)	草稿記号と頁	Bernet* による執筆時期の グループ分け (G.1～G.5)				
A Jahrbuchで刊行されたテキスト群				G.1: 1900-1901, G.2: 1904-1905, G.3: 1906-1909, G.4: 1909-1911, G.5: 1912-				
第一部 内的時間意識に関する1905年の講義								
序論								
§ 1.	客観的時間の排去	1905年	F I 6 Bl. 3-16 u. 19		G.2			
§ 2.	《時間の根源》への問	1905年	F I 6 Bl. 3-16 u. 19		G.2			
第一章 時間の根源に関する布伦ターノの説								
§ 3.	根源的 (ursprünglich) 連合	1905年	F I 6 Bl. 3-16 u. 19		G.2			
§ 4.	未来の獲得と無限時間	1905年	F I 6 Bl. 3-16 u. 19		G.2			
§ 5.	時間性格による諸表象の変遷	1905年	F I 6 Bl. 3-16 u. 19		G.2			
§ 6.	批判	1905年	F I 6 Bl. 3-16 u. 19		G.2			
第二章 時間意識の分析								
§ 7.	時間客観の把握を瞬間的把握とする解釈と持続的作用とする解釈	1905年	F I 6 Bl. 3-16 u. 19 F I 6 Bl. 17-18		G.2			
§ 8.	内在的時間客観とその現出様式	1911年	F I 6 Bl. 20-23 → Nr. 50				G.4	
§ 9.	内在的客観の現出の意識	1911年	F I 6 Bl. 20-23 → Nr. 50				G.4	
§ 10.	経過現象の連続体、時間の図表	1911年	F I 6 Bl. 20-23 → Nr. 50				G.4	
§ 11.	根元的印象 (Urimpression) と過去把持的変様	・1908- 1909年 ・1905年	F I 6 Bl. 27 → Nr. 50 F I 6 Bl. 24		G.2	G.3		
§ 12.	独特な志向性としての過去把持	1908年秋	F I 6 Bl. 29-33			G.3		
§ 13.	印象があらゆる過去把持に先立つことの必然性、過去把持の明証	1908年秋	F I 6 Bl. 29-33 → Nr. 47			G.3		
§ 14.	時間客観の再生 (第二次記憶)	1905年 / 1917年	F I 6 Bl. 34-35、後半は不明 (1917記憶のアプリオリについてのメモ?)		G.2			G.5
§ 15.	再生の種々の成就様態	1917年	不明 (1917記憶のアプリオリについてのメモ?)					G.5
§ 16.	過去把持や想起とは異なる現在化としての知覚	1905年	F I 6 Bl. 35-37		G.2			
§ 17.	再生に対立する自己能与的作用としての知覚	1905年	F I 6 Bl. 35-37		G.2			
§ 18.	持続および継起の意識を構成する場合の想起の意義	1917年	草稿不明					G.5
§ 19.	過去把持と再生の (第一次記憶と第二次記憶ないし想像の) 相違	1905年	F I 6 Bl. 39-40 u. 45		G.2			

§ 20.	再生の《自由》	1911年	F I 6 Bl. 42 → Nr. 50				G.4	
§ 21.	再生の明晰性の諸段階	1917年	草稿不明					G.5
§ 22.	再生の明証	1901年	F I 6 Bl. 44 → Nr. 2	G.1				
§ 23.	再生された今と過去との合致、想像と想起の区別	1907-09年	F I 6 Bl. 47 → Nr. 45				G.4	
§ 24.	想起の場合の未来把持	1917年	F I 6 Bl. 56 Stein によって推敲					G.5
§ 25.	想起の二重の志向性	1907-09年	F I 6 Bl. 48-49 u. 51 → Nr. 45				G.4	
§ 26.	記憶と予期の相違	1907-09年	F I 6 Bl. 50 51-52 → Nr. 45				G.4	
§ 27.	記憶、すなわちすでに知覚されているということの意識	1907-09年 /1901年	F I 6 Bl. 51-54 → Nr. 45 Blätter: 10c, 10d → Nr. 18	G.1			G.4	
§ 28.	記憶と心像意識、措定的再生としての記憶	1901年/ 1907-09年	F I 6 Bl. 53-54, 52 u. 55 Blätter: 10c, 10d → Nr. 18 Z15, Z16	G.1			G.4	
§ 29.	現在の記憶	1907-09年	F I 6 Bl. 52 u. 55 Z15, Z16, Nr. 45				G.4	
§ 30.	過去把持的変遷における対象的志向の保持	1905年	F I 6 Bl. 57-59		G.2			
§ 31.	根源的印象と客観的・個体的時点	1905年	F I 6 Bl. 57-59, 60-63		G.2			
§ 32.	単一の客観的時間の構成に対する再生の寄与	1905年	F I 6 Bl. 64 u. 75		G.2			
§ 33.	若干のアプリオリな時間法則	1905年	F I 6 Bl. 63 u. 65		G.2			
第三章 時間および時間客観の構成の諸段階								
§ 34.	構成の諸段階の区別	1907-09年	F I 6 Bl. 66 E. Stein によって編集 → Nr. 40				G.4	
§ 35.	構成された統一と構成する流れとの相違	1911年以前	F I 6 Bl. 67-74 → Nr. 54				~ G.4	
§ 36.	絶対的主観性としての、時間構成の流れ	1911年以前	F I 6 Bl. 67-74 → Nr. 54				~ G.4	
§ 37.	構成された統一としての超越的客観の現出	1911年以前	F I 6 Bl. 67-74 → Nr. 54				~ G.4	
§ 38.	意識流の統一と同時性および継起の構成	1911年以前	F I 6 Bl. 67-74 → Nr. 54				~ G.4	
§ 39.	過去把持の二重の志向性と意識流の構成	1911年以前	F I 6 Bl. 67-74 → Nr. 54				~ G.4	
§ 40.	構成された内在的内容	?	情報欠如					
§ 41.	内在的内容の明証、変化と不変化	1905年	F I 6 Bl. 75-77		G.2			

§ 42.	印象と再生	1911年	1911年以降の手記に関わる				G.4 ～
§ 43.	事物の諸現出の構成と諸事物の構成、構成された統握と根元的統握	1911年	1911年以降の手記に関わる				G.4 ～
§ 44.	内部知覚と外部知覚	1911年	1911年以降の手記に関わる				G.4 ～
§ 45.	非時間的超越の構成	1911年	1911年以降の手記に関わる				G.4 ～
第二部 時間意識の分析について、1905-1910年に書かれた補遺と補足			Boehmによる 関連づけ	関連づけによる年代推定			
I.	根元的印象と、その変様の連続体	不明	§ 11, S. 29ff.	1908-1909			
II.	現前化と想像——印象と想像	不明	§ 17, S. 40.	1905			
III.	知覚と記憶の関連志向——時間意識の諸様態	不明	§ 23, S. 50ff.	1907-1908			
IV.	想起と、時間客観および客観的時間の構成	不明	§ 32, S. 69ff.	1905			
V.	知覚と知覚されたものとの同時性	不明	§ 33, S. 72.	1905			
VI.	絶対的な流れの把握——知覚の四つの意味	不明	§ 34, S. 73ff.	1907-1909			
VII.	同時性の構成	不明	§ 38, S. 76ff.	～1911			
VIII.	意識流の二重の志向性	不明	§ 39, S. 80ff.	～1911			
IX.	根元的意識と、反省の可能性	不明	§ 39, S. 82f., § 40, S. 83f.	～1911			
X.	時間の客観化と時間に内在する事物存在の客観化	1907	F I 13 Bl. 120, 202, 203, 221. § 43, S. 90ff.	1911～			
XI.	十全な知覚と不十全な知覚	1907	F I 13 Bl. 120, 202, 203, 221	1911～			
XII.	内的意識と、諸体験の把握	不明	§ 44, S. 94ff.	1911～			
XIII.	内在的時間客観としての自発的統一の構成 形態としての判断と、時間を構成する絶対的意識	不明	§ 45, S. 96ff.	1911～			
B Husserliana X での補足テキスト			可能な限り年代順に並んでいる。	Bernetによる修正とグループ(Gと略す)分け			
I.	「新鮮な」記憶と「再」記憶[想起]との本質的区別の導入。および時間意識における内容の変化と統握の区別について						
Nr. 1	より長く続く変化の経過の統一の表象にはいかにして至るのか〈直観とRepräsentation〉	1893年	K I 55 Bl. 2-6, 8	G.1 (1900-1901)			
Nr. 2	時間知覚、記憶などの明証	1901以前	F I 6 Bl. 44	G.1 (1900-1901)			
Nr. 3	〈十全なる予期 (Erwartung)〉		F I 6 Bl. 126	G.1 (1900-1901)			
Nr. 4	省察〈知覚、記憶、予期〉		F I 6 Bl. 50	G.1 (1900-1901)			

Nr. 5	〈単一の作用としての持続する知覚〉	1898-1900年	F I 6 Bl. 119	G.1 (1900-1901)
Nr. 6	〈プレントナーノと記憶 (das Gedächtniss) の明証についての問い〉		F I 6 Bl. 135	G.1 (1900-1901)
Nr. 7	直観、過去存在の明証—過去存在の単なる表象 〈第一次記憶での内容の変化を見かけ上前提しなければならないことについて〉		F I 6 Bl. 134	G.1 (1900-1901)
Nr. 8	類似性による十全化—対象の表象と対象の知覚の表象 〈以前に知覚されたものと像的に似ている表象像 (Repräsentant) として「色褪せてはいるが」まだ意識しているもの〉		F I 6 Bl. 123	G.1 (1900-1901)
Nr. 9	論争 〈記憶の現在性、記憶されたことの過去存在〉	1904年	F I 8 Bl. 97	G.1 (1900-1901)
Nr. 10	根源的過去意識と想起との間に本質的な区別があるということに関する新旧の考察		F I 6 Bl. 91	G.1 (1900-1901)
Nr. 11	時間客観の過ぎ去った部分についての知覚の瞬間的位相は想像という性格を持つか		F I 6 Bl. 84	G.1 (1900-1901)
Nr. 12	時間意識の明証性		F I 6 Bl. 124-125	G.1 (1900-1901)
Nr. 13	時間的なるものの知覚と時間性の知覚	Silvaplanaに滞在中	F I 6 Bl. 93	G.1 (1900-1901)
Nr. 14	それによって知覚が直接的記憶になる直観的変様は、呈示的内容の単なる変化として理解することができるのか	Silvaplanaに滞在中	F I 6 Bl. 113-115	G.1 (1900-1901)
Nr. 15	時間と記憶。〈今の知覚、記憶の知覚、そして想像の記憶。統覚の仕方の中に区別を転嫁すること〉	1901年 12月20日	F I 6 Bl. 95-96	G.1 (1900-1901)
Nr. 16	〈知覚において現前的なものとして与えられうるもの〉		F I 6 Bl. 94	G.1 (1900-1901)
Nr. 17	〈変様の意識の問題〉		F I 6 Bl. 128	G.1 (1900-1901)
Nr. 18	記憶の性格—同一性による再現前とは、いったい何を意味しているのか	1905年	F I 6 Bl. 53-54, 92	G.2 (1904-1905)
II. 客観的時間の排去、時間客観、客観化の現象学とそのアポリア				1904年から1905年初めまで
Nr. 19	〈客観的時間に関する全ての想定を完全に取り除くこと〉	1904年	F I 6 Bl. 129	G.2 (1904-1905)
Nr. 20	〈継起の知覚は知覚の継起を前提にしている〉	1904年 休暇中	F I 6 Bl. 107	G.2 (1904-1905)
Nr. 21	〈一つの同じ継起を繰り返して現前化することを基礎とした認識〉	1904年	F I 6 Bl. 121-122	G.2 (1904-1905)

Nr. 22	十全なる記憶は可能か、可能だとしたらどのようにして可能なのか	1904年	F I 6 Bl. 120	G.2 (1904-1905)
Nr. 23	時間の統一とその無限性		F I 6 Bl. 101	G.2 (1904-1905)
Nr. 24	個別的(時間的)対象の知覚〈時間的なものの知覚の一つの位相において、それ以前の位相の知覚的現出を見いだすことはあるのか〉	1904年9月	F I 6 Bl. 85-86	G.2 (1904-1905)
Nr. 25	十全なる記憶 以前の知覚 過去の知覚。試み(アポリア)〈なぜ、新鮮な記憶は単に持続しつづける根源的知覚できないのか〉		F I 6 Bl. 109	G.2 (1904-1905)
Nr. 26	諸知覚はそれ自身は絶えず変転しているその都度の今としての「時間規定」を含んでいるという仮説と、第一次記憶は、そのような知覚が残存しているという意味を有しているという仮説について		F I 6 Bl. 98, 110, 111	G.2 (1904-1905)
Nr. 27	〈概観の試み。基本的な時間的区別。自己現前と客観化〉		F I 6 Bl. 99, 108, 97	G.2 (1904-1905)
Nr. 28	時間意識の流れの中での、音の同一性と時間客観の同一性と時間客観の全ての位相の同一性	1905年2月	F I 6 Bl. 102-103	G.2 (1904-1905)
Nr. 29	分配された対象と分配されていない対象とのマイノングの区別	1905年2月	F I 8 Bl. 90-94	G.2 (1904-1905)
Nr. 30	三層の位相	1905年2月	F I 6 Bl. 89	G.2 (1904-1905)
Nr. 31	図式 〈今の統握と延長的知覚〉	1905年2月	F I 6 Bl. 90	G.2 (1904-1905)
Nr. 32	連続体	1905年2月	F I 6 Bl. 112	G.2 (1904-1905)
Nr. 33	シュテルン-マイノングの論争の帰結	1905年2月	F I 8 Bl. 96	G.2 (1904-1905)
Nr. 34	相互連続性という意識の問題	1905年2月	F I 6 Bl. 82, 136	G.2 (1904-1905)
III. 個体化についてのゼーフェルダール草稿				
Nr. 35	変化においても同一に止まるもの、あるいは不変化において同一に止まるものとしての時間事物の統一性 1905年夏休み	Seefeldでの夏休み 1905年	A VII 25 Bl. 27 u. 2-11	G.2 (1904-1905)
Nr. 36	ゼーフェルダール反省について〈タイプのなもの、数学的なもの、そして時間対象の統一性〉	Seefelder Reflexion**	A VII 25 Bl. 12-16	G.5 (1917)
Nr. 37	時間客観	—————	A VII 25 Bl. 17-20	G.5 (1917)
Nr. 38	以上のゼーフェルダールでの考察の仕方全体に対する反論	—————	A VII 25 Bl. 21-24	G.5 (1917)
IV				
Nr. 39	知覚における時間 1907年初頭	1906/7年 1909年冬学期	F I 7 Bl. 32-33, 41-51	G.3 (1906/07-1909)

Nr. 40	客観性の諸段階		F I 6 Bl. 66	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 41	現出と時間——体験作用と体験 その中で、意識体験が複数の形で 体験されるところの体験作用とし ての意識		F I 6 Bl. 116-118	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 42	明証性		F I 6 Bl. 87	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 43	問題		F I 6 Bl. 88	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 44	意識の時間形式		F I 6 Bl. 100	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 45	〈意識流の二重の志向性〉	1907- 1909年	F I 6 Bl. 80, 43, 47, 46, 48, 49, 51, 52, 55	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 46	〈全ての区別を統握の仕方に帰着 させることの問題性〉		F I 6 Bl. 127	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 47	〔「内容的契機」と「統握的契機」 と新鮮な記憶の明証性〕	Silvapiana	F I 6 Bl. 29-33	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 48	根源的な時間的ずれ [延期]	————	F I 6 Bl. 83	G.4 (1909-1911)
Nr. 49	〈われわれは今の時点で、一時的 な内容から成る連続体を同時に有 しているのか、あるいはさらには 「統握」連続体も同時に有してい るのか〉	1908年から 1909年夏学 期までの間	F I 6 Bl. 104-106	G.4 (1909-1911)
Nr. 50	第一次的記憶変様	1908年から 1909年夏学 期までの間	F I 6 Bl. 27-28, 25-26	G.4 (1909-1911)
V. 研究の最初の区切りについて				
Nr. 51	〈現象学的基礎考察における時間 問題〉 1909年 5月から6月	1909年 夏学期	F I 17 Bl. 26-38	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 52	経過、ないしは個別的な（持続す る）諸対象の単なる表象 記憶の 知覚の明証性、現在のなものにつ いての知覚の明証性（1909年 8 月末）	1909年 8月 夏学期	F I 6 Bl. 130-133	G.3 (1906/07-1909)
Nr. 53	内的意識の志向性	1911年 11月10日	F I 6 Bl. 20-23, F I 6/42	G.4 (1909-1911)
Nr. 54	〈意識（流れ）、現出(内在的対象)、 そして対象〉		F I 6 Bl. 67-74	G.4 (1909-1911)

参考:

* Bernet は執筆時期のグループ分けを〈B Husserliana X での補足テキスト〉のみにして行ったが、他のテキストに関しては、その区分を使用して、筆者が行った。

** 執筆年の欄のみえ消しは、Husserliana X の編纂者 Boehm の推定が、Felix Meiner 版の編纂者 Bernet によって修正されたことを表す。

[草稿の signature と頁に関しては、<https://hiw.kuleuven.be/hua/manuscript> の index の情報によって確認した。]

Abstract

The Fundamental Conceptions and Aporiae in Husserl's Early Theory of Time-Consciousness (I)

MIYAHARA, Isamu

It has been widely admitted that the main text of *Husserliana* Bd. X is very difficult to interpret consistently because of its compilation. The first version of the main text appeared in one of the *Jahrbuch* (1928) collected from various Husserl's manuscripts written in a comparatively wide period, and edited by Edith Stein and Martin Heidegger in an arbitrary way. At last in the year 2013, the PhB version of *Husserliana* Bd. X was published by Rudolf Bernet with a long introduction, in which he confirms the date of each manuscript. So we investigate the textual genesis of it and the whole structure and relations of the problems concerning the time-consciousness on the basis of such a textual criticism. Especially we propose a new interpretation of the diagram of time-consciousness of §10 and its text, namely; Husserl's famous diagram originated in the diagram drawn by Franz Brentano, which we can know through the report by Carl Stumpf. We conclude that it is impossible to understand the phrase 'die stetige Reihe der Ordinaten' in the text of §10 without knowing Brentano's diagram.

Keywords: Husserl, time-consciousness, Brentano, diagram